

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2012年3月8日放送

「第27回日本臨床皮膚科医会⑥ モーニングセミナー1

忘れがたいデルマドローム患者－患者と先人と仲間との邂逅」

井上医院 院長

井上 勝平

## はじめに

皮膚科医の道を歩き続けて52年（勤務医40年と開業医12年目）になるので、数多くのデルマドロームに悩む患者に出逢ってきた。今夜は忘れがたい患者を経系に、そして多くのことを学んだ先人の知見と苦楽を共にした仲間の活躍ぶりを緯系に思い出を織った。

## 東京大学研究生と虎の門病院医員時代

1961年、東京大学研究生となり川村太郎教授のもとで、最初に主治医になった入院患者は胃がんの頸部転移例であり、macro が分からないと micro も分かるまいと実感し、診断がついても、「元気なうちに退院させなさい」と言われ、医療の限界を垣間見た。

川村教授は母斑・母斑症研究の第一人者であり、「母斑・母斑症進展の推進力は常に成因に関心を持った臨床医の観察力と分析力と洞察力にある」という教訓は私の行く道を示す羅針盤となった。

1962年、虎の門病院に出向した。船橋俊行部長は「皮膚科診療では舌（内診）・しも（外陰などの全身）・下（皮疹の下床）の3つの“した”に留意しないと大切な病変を見落としてしまう三下奴になるぞ」と諭された。

故川村太郎先生



恩師・川村太郎教授

図1

船橋先生が兄事されていた安田利顕先生は、**dermadrome** の重要性をいち早く強調されていた。

### 熊本大学講師と国立熊本病院医長時代

1963年9月に母校の熊本大学助手となり中村家政教授の指導で「大田母斑の研究(日皮会誌 77:125、1967)」で学位を受けた。1968年に国立熊本病院医長となり「糖尿病と皮膚疾患(医療 24{11.12 巻、1970、塩田賞})」をまとめ、皮膚を診て、全身を診ることに一段と関心が強くなった。1970年に講師・医局長として大学に戻り、熊本と宮崎の県境にあった土呂久鉦山の粉塵による慢性砒素中毒症の公害認定に貢献できた。

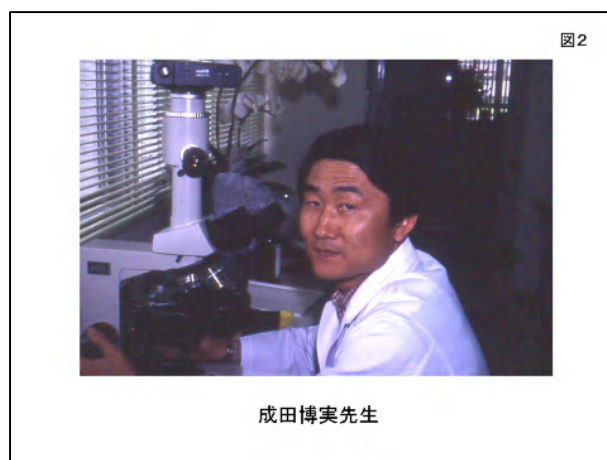
### 宮崎医科大学教授時代

1977年春、新設された宮崎医科大学の初代教授として赴任した。優れてやさしい若い仲間が教訓的な症例を学会や医学誌上に積極的に発表してくれた。その縁で西山茂夫・北村啓次郎先生と共著で「皮膚でわかる内科疾患(南山堂、2000年)」と「皮膚科専門医テキスト(南山堂、2002年)」の全身と皮膚の章を分担執筆できた。

西山茂夫先生は「宮崎地方会では、大学と開業医の連携が見事にかみ合い開業医の素晴らしい発表を聞くことができる」と、皮膚病診療誌上で褒めてくれた。

成田博実先生は、「クリオグロブリン血症を伴った IgG $\kappa$  型多発性骨髄腫(西日皮 41:647、1979)」という素晴らしい論文を発表した。成田先生は現在、宮崎県皮膚科医会の会長をしているのも納得である。この患者が「冷湿布すると激痛が走るので温湿布をしてくれ」と懇願していたのに、適切に対応するのが遅れたのは指導医であった小生の怠慢であった。

この苦い体験から、帯状疱疹の患者が呟いた「風呂に入っている時は、痛くない」という言



葉を聞き逃さず、外山望先生は「帯状疱疹の治療一局所加温・交感神経ブロック併用療法の有用性（西日皮 43：432、1981）」を実践した。悲惨な帯状疱疹後神経痛に悩んでいる患者の多くは当初に冷やされている事実を他科医には繰り返し指摘すべきである。外山先生は帯状疱疹に強い関心を持ち続け、「宮崎県皮膚科医による大規模帯状疱疹疫学調査（宮崎県医師会医学会誌 35：2011）」をまとめあげ高い評価を受けている。

青木洋子先生は高齢女性の痲皮型疥癬を素手で愛護的に手当て、頑固な頭痛がクリプトコッカス髄膜炎であり、免疫不全の成因が ATL のくすぶり型であることを見出した（皮膚リンフォーマ 6：16、1987）。実地診療に当たっては、鋭い視力と広い視野と深い洞察力が必要であると教えられた。

田尻明彦先生も痲皮型疥癬を素手で治したが、激痒に対して抗ヒスタミン剤を内服させたところ尿閉が出現した「老人の疥癬（皮膚病診療 9：274、1988）」。前立腺肥大症と抗ヒスタミン剤と尿閉の関連を察知するのが遅れて患者を苦しめたのは指導医であった小生の責任であった。田尻先生は日臨皮九州ブロックの理事を長年続けており、開業医としては後輩である小生と指導医の立場が逆転したのは、先輩冥利に尽きるというものである。



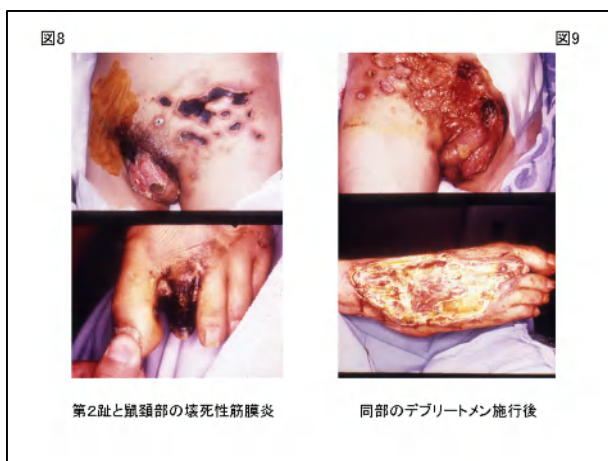
武富功雄先生はダリエ病に当時まだ市販されていなかったエトレチネートを内服させ奏効を得た「Etretinate の奏効した Darier 病の2例（皮膚臨床 23:1649、1981）」。本剤は有用な薬だが、女性では2年間、男性で半年間避妊、献血は2年間禁止されている。薬を処方することは医師の業（わざ）であるが、業（ごう）でもある。武富先生は最高の開業医であったが、6年前に逝去したのは無念である。



二分脊椎症を見逃さず、排尿や歩行障害の発する前に手術するなどの的確に対応するの

が医療者の責務である。神経管閉鎖不全は妊娠 1 ヶ月前から妊娠 3 ヶ月まで葉酸を 1 日 0.4mg 以上摂取すれば、その 7 割は予防できる。しかし妊娠可能な女性の 9 割、内科医の 8 割がこの重要な事実を認識していないという調査がある。医食同源は医療の根幹である。

皮膚外科にも優れた岡崎美知治先生が痛恨の思いで報告した「壊死性筋膜炎の剖検例（西日皮 47：1036、1985）」は壊死部の臭いが強いことから嫌気性菌が関与していると推察（後日 *Bacteroides fragilis* と同定）し、広範囲にデブリートマンを行ったが、10 日後に敗血症で死亡した。剖検の結果、壊死病変は右足背から右腰・外陰まで一見正常な皮膚直下の筋膜に連続していた。剖検に立ち会った医局員一同はこの事実を目に焼きつけた。まさに autopsy は auto（自分自身）で opsy（目で見ると）ことである。



### 長野県開業医時代

2000 年春に宮崎医科大学を定年退官し、諏訪湖を源流として 200km 南下し、浜松市から海に流れ込む天竜川の中流に位置する家内の郷里である人口 11 万人の飯田市で開業して 12 年目の春を迎える。

患者と先人と仲間から得た貴重な知見を実地診療に生かすことで、他科医をして、『さすが皮膚科医ですね・・・』と言わせることが何回もある。Joseph 結節から卵巣癌を発見したこともある（皮膚病診療 27：435、2005）。

### おわりに

ゲーテは『生涯を通して続けられる仕事についての人は幸福な人だ』と語っている。

老生も惚れて選んだ皮膚科医の道を歩き続けて 52 年になる。かなり惚けてきたが、今でも現役で働ける恍惚の人だと自惚れている。

参考文献

- 1) 井上勝平：患者と先人と仲間との出会い，皮膚病診療：26，780-783，2004.
- 2) 井上勝平：忘れがたいデルマドローム患者 — 患者と先人と仲間との邂逅 — 日臨皮会誌：28，624-626，2011.